大阪歴史博物館所蔵　昭和初期の８mmフィルムについて

船越　幹央

はじめに

近年、庶民が撮影した映像について、その価値が認められ、博物館などでも収集・保管や公開が進められている。その最初期である昭和初期において、庶民が撮影し得るフィルムサイズには、８mm、9.5mm、16mmがあった。本稿は、当館所蔵の藤井家旧蔵８mmフィルム（藤井聰一氏寄贈）について、その概要と特徴的な映像について紹介するものである。

１．藤井家旧蔵8mmフィルムの概要と映像内容の保存作業

平成15年度、大阪歴史博物館へ昭和初期に撮影された８mmフィルム22巻が藤井聰一氏より寄贈された。その多くは、父・藤井健次郎の撮影にかかる。

藤井健次郎は、明治38年（1905）12月12日、大阪市に生まれた。家は船場の久太郎町（現・大阪市中央区）で薬種問屋を営んでいた。結婚後、郊外住宅地として開発された西宮北口（兵庫県西宮市）の甲風園に転居した。昭和７年（1932）のことで、前年に長男の聰一氏が誕生していた。その後、４人の兄弟が生まれた。健次郎は、大阪市内に120軒余の借家を経営したといい、戦後まもなくまで主として家賃収入で暮らしていた。そのため、生活には比較的余裕があり、趣味生活も楽しんでいたようで、他の寄贈品には俳句の句集などが多数あり、また多くの写真を撮影した。しかし戦争で借家が焼け、暮らし向きは一変、戦後は知人の紹介で神戸市役所に勤務した。[1]

今回紹介する８mmフィルムは、主として彼が昭和初期に趣味の一環として撮影したもので、22巻が残されている。当時の８mmフィルムは日本に輸入されてまもない時期であり、フィルムはすべてコダックである。缶、または紙箱に収められており、そのほとんどにはペンなどで撮影日や撮影場所が記されている。長さは、およそ200フィートから400フィートであるが、劣化状況などによって正確には計測できない。

これらのフィルムは、時代を経ることによって著しい劣化を起こし、いわゆる“ビネガーシンドローム”（酢酸セルロースフィルムが加水分解によって劣化する現象）に陥っており、内容が失われる危険をはらんでいた。多くのフィルムには、カーリングや収縮、乳剤面の剥離、結晶の析出などのダメージが生じていた（図１）。そのため、受入れ後は、フィルムの内容（コンテンツ）を保存する作業を順次実施し、平成25年度に全巻の作業を終えた。内容の保存方法は、基本的には原フィルムのデジタルデータへの置き換えであるが、一部のフィルムについては、原フィルムを16mmフィルム、ないしは35mmフィルムにブローアップする作業を経た後、デジタル化を行っている。これは、作業開始当初はいわゆるテレシネによって原フィルムをデジタルデータに置き換える方法を取っていたが、その

大阪歴史博物館　研究紀要
第13号　87－93ページ　2015年２月

（表）藤井聰一氏寄贈　8mmフィルム目録

No.	タイトル	撮影年月日	収納	カラー/モノクロ	主な内容（撮影場所など）
1	天然記念物 但馬名勝 出石鶴山	昭和12年6月	缶	モノクロ	兵庫県：江原駅カ、出石のコウノトリ、鶴山のコウノトリ見物
2	黒部峡谷・猿飛・祖母谷温泉	昭和12年7月17日	缶	モノクロ	富山県：立山連峰、宇奈月駅、専用鉄道、黒部第二発電所、黒部峡谷、猿飛の奇勝、奥鐘橋、黒薙温泉駅
3	第二十三回全国中等学校野球大会（於甲子園球場、中京対熊工）	昭和12年8月20日	缶	モノクロ	兵庫県：甲子園球場、野球塔、中京商ー熊本工の決勝戦、表彰式
4	朝鮮①	昭和12年【註1】	缶	モノクロ／カラー	大阪市：天王寺駅主催朝鮮観光団／朝鮮：京城（ソウル）、京城駅、市街、朝鮮神宮、南大門、博文寺、葬列、食道園、徳寿宮、総督府、蝶龍窟、平穣（ピョンヤン）駅、平穣神社、街の光景
5	朝鮮②	昭和12年	缶	カラー／モノクロ	朝鮮：神渓寺、金剛山（万物相など）、内金剛、長安寺、仁川港
6	動物園・広田神社・伊勢神宮・二見ノ浦	昭和13年1月3日	缶		劣化が激しく内容不明（テレシネ不能）
7	国立公園 大屋島・高松・栗林公園	昭和13年1月27日	缶	モノクロ	香川県：屋島、付近の眺望、栗林公園、高松港
8	隣保競走	昭和13年1月31日	箱	モノクロ	場所不明：花火、学校校庭での隣保競争（運動会、バケツリレーなど戦時色あり）
9	道後温泉・松山・岩堰遊園地	昭和13年1月	缶	モノクロ	愛媛県：松山港（物売り）、道後温泉駅、道後温泉・本館、道後公園、旅館角半、石手寺（楼門、三重塔）、松山城、大街道、松前駅、岩堰遊園地
10	潮岬・勝浦・那智山	昭和13年5月20日	缶	モノクロ	和歌山県：潮岬灯台、橋杭岩、勝浦・忘帰洞、千畳敷、紀の松島めぐり遊覧船、青岸渡寺、熊野那智大社、那智の滝
11	潮岬・勝浦・那智山（続）	昭和13年5月【註2】	缶	モノクロ／カラー	和歌山県：熊野本宮大社、湯峰温泉、壺湯、東屋、新宮・熊野速玉大社、浮島、熊野灘・鬼ケ城、瀞峡の遊覧（プロペラ船、筏流し）
12	（なし）	昭和13年6月5日	箱	モノクロ	場所不明：夜景、打上げ花火
13	甲風園水害状況・神戸水害状況	昭和13年7月5日	缶	モノクロ	兵庫県：西宮市・甲風園水害、神戸市・三宮水害
14	玉川峡（新涼の高野より玉川峡を探ぐる）【註3】	昭和13年8月19日【註4】	缶	モノクロ	和歌山県：高野山、苅萱堂、奥の院、玉川峡のキャンプ
15	出雲大社	昭和15年2月【註5】	箱	モノクロ	島根県：出雲大社（雪景色）、美保関、美保館、関の五本松
16	大島・上野・月ケ瀬		缶	モノクロ	伊豆大島：三原山（観光登山）／静岡県：富士山遠望、富士山本宮浅間大社、白糸の滝／三重県：伊賀上野・蓑虫庵／奈良県：月が瀬梅林
17	大島（続）		箱	モノクロ	伊豆大島：海上より島の遠景、富士山遠望
18	三原山	【註6】	箱	モノクロ	伊豆大島：三原山／静岡県：伊豆下田、蓮台寺温泉、修善寺温泉、源頼家廟所
19	京都・吉野・嵐山の桜・赤目四十八滝		缶	カラー／モノクロ	京都市：清水寺、高台寺忠霊塔、円山公園の桜、嵐山／中国：軍楽隊とムッソリーニ／奈良県：吉野・金峯山寺、吉野山の桜／庭の幼児／京都市：御室の花見／三重県：赤目四十八滝／兵庫県：加古川・闘龍灘／奈良県：奈良公園の鹿
20	（なし）		缶	モノクロ	岐阜県：十八楼跡、長良川の鵜飼、岐阜城（模擬天守）、養老の滝（掬水泉）／三重県：湯の山温泉／家の前の子どもたち／長野県：上高地／岐阜県：高山、木曽川カ
21	猿飛		箱	モノクロ	場所不明：夜景カ（ほぼ真っ暗な映像）
22	宝塚他		缶		劣化が激しく内容不明（テレシネ不能）

註1　この缶には年月日の記載がないが、No.5と一連のフィルムのため、この年とした。
註2　この缶には年月日の記載がないが、No.10と一連のフィルムのため、この年月とした。
註3　カッコ内のタイトルは、フィルム冒頭のインタータイトルによった。
註4　フィルム冒頭のインタータイトルの年月日によった。
註5　収納紙箱に押印された現像年月日のスタンプによった。
註6　天王寺駅主催旅行『全伊豆廻遊記念写真帖』（藤井聰一氏寄贈資料）によれば、昭和11年2月15日～20日の可能性があるが、やや時期が早いため保留とした。

後、フィルムの内容保存において推奨される方法である原フィルムを別のフィルムによって保存する方法へと移行したためである。受入れから一応の作業終了まで11年を要しているが、これは作業に必要な経費が比較的高額なためである。映像のみに特化したアーカイブではない当館のような施設にとっては他の資料も修復する必要があり、フィルムに対して支出できる費用が相対的に低くならざるを得ない。この問題は、本稿の主題ではないが、今後全国多くの博物館等で収蔵されるであろうフィルムの保存において、最も大きなボトルネックとなるに違いない。

2. フィルムの内容

８ｍｍフィルム22巻の内容の概略は、表の通りである。

タイトルと撮影年月日は、フィルムが収納されている缶や紙箱に書かれた記載（図２）を尊重したが、年月日については他の情報によった巻もある（表の註を参照のこと）。内容欄は、筆者がフィルム内容を実見した上で、知り得た事柄を記した。

これによると、撮影年については昭和12年（1937）から始まり、翌年にかけて過半数が撮影され、下限は昭和15年（1940）となる。

撮影場所については、地方別にみると、近畿を含むものが半数の11巻を占めており、他に中部・東海が５巻、中国・四国が３巻、朝鮮が２巻などとなっている。九州や関東以東がなく、朝鮮を除けば、西宮の自邸から比較的訪れやすい地域が多いことが分かる。

内容については、多くが旅行の様子を撮影したものであるが、中等学校野球大会（№３）、隣保競走（№８）といった催事もあり、また甲風園・神戸水害状況（№13）は、昭和13年（1938）の阪神大水害を撮影した映像である（後述）。缶や箱に書かれたタイトルと内容とに齟齬があるものもあり、また１巻の中に異なった内容が含まれているものもある（１本のフィルムで連続して撮影したためであろう）。

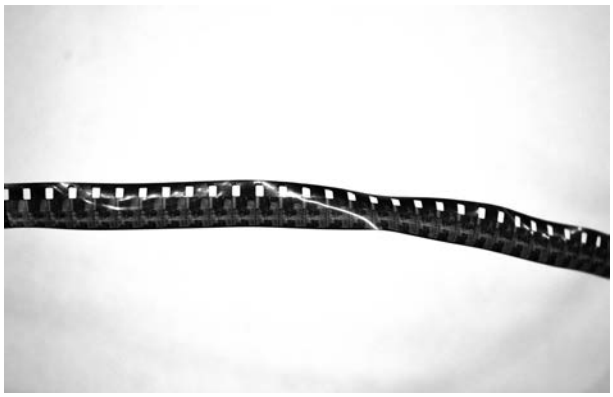
撮影者については、多くは藤井健次郎であると考えられる。しかし、紀伊半島の旅行を撮影したフィルム（№10、№11）は、藤井聰一氏寄贈資料に含まれる『熊野路に春を尋ねて』（昭和12年２月、天王寺駅）、および『熊野三山へ祈願の旅』（昭和13年５月、同前）に記録されている旅行であると判断され、その参加者名簿には健次郎の名前がなく、藤井弘造の氏名がある。そのため、少なくともこの２巻は藤井弘造の撮影と考えてよいであろう。

3. 特徴的な映像

ここでは、特徴のある２つの映像について紹介する。

（1）出石のコウノトリ見物（№1）

フィルムは缶に収納されているが、底のラベルには「天然記念物　但馬名勝　出石鶴山」と印刷物からの切り貼りがあり、ペンで「1937　６－７　藤井」と記されている。このフィルムは、１巻の中に（１）田植え風景、（２）コウノトリ見物、（３）大阪天満宮・天神祭り陸渡御の３つの内容が含ま



（図１）カーリングしたフィルムの例
（No.3「全国中等学校野球大会」）

（図２）フィルム缶（底面）のラベル例
（同上）

（図３）コウノトリ見物に来た藤井健次郎

（図４）出石・鶴山で営巣するコウノトリ

れている。天神祭りは７月の催事であるため、ペン書きの「1937　６－７」は、昭和12年（1937）６月から７月を示すものと解釈したい。

さて、映像に収められたコウノトリ見物であるが、長男・聰一氏の記憶によると、「ツルを見に行こうか」と言われ、母、妹と４人で旅行したという（当時、コウノトリはツルと混同されることが多く、地元でも「ツル」と称されていた）。兵庫県の出石（現・豊岡市出石町）は、かつてコウノトリの生息地として知られた。昭和初期には出石町とその周辺に50～60羽のコウノトリが生息していたといわれる。また、その繁殖地であった通称「鶴山」（桜尾山）は、繁殖地として天然記念物に指定されていた。藤井健次郎は、妻と息子（聰一氏）、その妹の４人で出石へ旅行した。聰一氏によれば、初日はコウノトリが帰巣しなかったらしく、健次郎は「鳥が帰ってくるまで待つ」と言って、さらに１泊して翌日に撮影したという。

映像は、まず出石付近に到着した家族の姿を映し出す（図３）。停車しているバスに「江原自動車株式会社」とあることから、山陰本線の江原駅前ではないかと考えられる。次いで、田んぼの上空を飛ぶコウノトリなどが登場。この場所は、出石市街の北西にあたる出石川沿いで、鶴山の近辺から東を向いて撮影されたと考えられる。その後、鶴山の山容が現れ、登り口にあった天然記念物の標柱（「天然紀念物鶴山鸛蕃殖地」、大正12年建立）が写される。そして主要部分は、鶴山で営巣するコウノトリの姿で、親鳥とヒナ２羽が写されている（図４）。ヒナは、かなり大きく育っており、巣立ち直前と思われる。健次郎の家族は、鶴山に小屋掛けされた茶店らしい場所からコウノトリを見ており、その様子も映し出されている（図５）。

当時、この場所はコウノトリ見物の観光名所となっていた。昭和２年（1927）刊の『名勝温泉案内』には、「鶴山　現在我国に於ける唯一の「鸛」渡来地で、その数約三十羽。（中略）山頂の樹梢に巣を営み、毎年五月より六月下旬に亙り育雛を行ふ、それを見物に行く者が多い」とある。(2)

この案内書にもあるが、ヒナの成長から考えても撮影時期は６月と考えてよいであろう。また、藤井一家のようにコウノトリを見物することが広く行われていた。

この映像は、戦前におけるコウノトリの飛翔と営巣を捉えた珍しい映像であるが、自然と人間の関係を考える資料として貴重な映像といえる。(3)

（2）阪神大水害（№13）

フィルムの缶には「甲風園水害状況　神戸水害状況」の記載があり、昭和13年（1938）７月５日に撮影された旨が記されている。

兵庫県芦屋市、神戸市などを中心に大きな被害をもたらした阪神大水害は、昭和13年７月３日から５日にかけての豪雨（総雨量400～600mm）により発生した。六甲山系では山崩れが起こり、その雨水と土砂は住吉川や芦屋川などを流れくだり、市街地にあふれ出た。そのさまは、谷崎潤一郎の小説「細雪」にも描かれている。

当時、藤井健次郎は西宮北口の住宅地・甲風園に在住していた。阪神今津線に沿って、その西側に開発された住宅地で、津門川と挟まれた一角になる。健次郎は、昭和７年（1932）２月に転居してきた。

（図５）出石・鶴山でコウノトリを見物する母子

（図６）インタータイトルの例
（No.13「甲風園水害状況・神戸水害状況」）

（図７）西宮北口・甲風園の出水

（図８）神戸・三宮の土砂や流木

フィルムには、前半に甲風園の水害状況が撮影され、後半に神戸・三宮付近の状況が写される。この映像には、健次郎としては珍しくインタータイトル（章題）が入っているので、それを列挙しよう（図６）。

（１）「甲風園水害状況　昭和十三年七月五日」

（２）「水道事務所前を神戸線下に押し寄せる濁水」

（３）「稍減水せる四号地北端園内に溢れし箇所」

（４）「園内浸水を半減せる富倉川上流西堤の決潰場所」

（５）「神戸三ノ宮阪急前」

（１）は全体のタイトルで、午後に雨が小止みになった７月５日に撮影されたことが分かる。（２）から（４）は甲風園とその付近を撮影したもので、富倉川は津門川の西側を流れる川である。（５）は、神戸市の阪急電鉄・三宮駅周辺の光景である。

映像の内容を確認すると、まず前半部分は50ｃｍ程度の冠水が住宅地に見られ、そこを進む人や自転車が写されている（図７）。また、富倉川の決壊場所を捉えている。後半部分は、神戸・三宮付近の状況である。一面に土砂や木材が堆積しており、泥まみれの中を裸足で歩く人や、仮設の木道を渡っていく人たちがいる。煙草店などの建物も２階下あたりまで埋もれている。天気はすでに晴れてきたようだが、水流は収まらず、そのなかで復旧に取り掛かる人々などが写されている（図８）。

小型で手持ち撮影が可能な８mmカメラという「記録装置」を手にした庶民が、事件、事故、災害などの現場を撮影する新たな記録の形が、この映像には如実に表れている。

4. おわりに

映像を中心としたアーカイブにとって、映像資料の収集、保存と活用は、取り立てて新しい課題ではない。しかし、多様な資料を取り扱う地域の博物館（地方自治体などが設置する施設など）では、その扱いが課題となっている。ワンカットで完結することが基本である写真に比べ、動画である映像資料はその内容確認や活用において困難な面が多い。また保存についても、フィルムの劣化（ビネガーシンドローム）の深刻さは博物館が取り扱う資料のなかでも最も厳しいもののひとつである。これらの課題を克服するためには、映像資料に熟知した学芸員を養成、配置するとともに、経費的な手当てや適切な保管場所の確保が欠かせない。しかし、それを乗り越える目途は多くの地域博物館では今後の課題といえる。

当館でも、戦前の映像については未知の分野への取り組みとして始まった。現在も模索中であることは否めないが、今後の方向性を探るべく試行錯誤を続けたいと考えている。

【註】

（１）平成17年（2005）８月16日に行った藤井聰一氏と知人・溝口重男氏からの聞き取りによる。

（２）松川二郎『名勝温泉案内』誠文堂、1927年

（３）撮影場所の特定などについて、兵庫県立コウノトリの郷公園のご教示を得た。記して感謝します。